

今年度の活動

2019年度はIAMASに赴任して4年目を迎え、個人研究の新規開拓とともに、共同研究の成果が様々な形で実を結んだ一年であった。

個人研究として、「色彩と空間展から大阪万博まで—60年代美術と建築の接地面」を『現代思想』2020年3月臨時増刊号で発表したほか、アートとデザインの関係史に関わる調査研究および講演を各所で行った。

IAMASでの共同研究としては、昨年より継続している移動体芸術プロジェクトでの研究成果をISEA2019および三村尚彦、門林岳史（編著）『22世紀の荒川修作+マドリン・ギンズ 天命反転する経験と身体』（フィルムアート社、2019年12月25日）で発表した他、前回の岐阜おおがきビエンナーレを背景とした藤幡正樹《Light on the Net》（1996）に関する論考をISEA2019で発表し、広く知らせることができた。また、国際日本文化研究センター、京都大学人文科学研究所での研究会への参加を通じて、今後の共同研究の可能性を探った。

メディア表現研究の実践として、第8回岐阜おおがきビエンナーレ「メディア技術がもたらす公共圏」のシンポジウム+関連展示で成果を挙げることができた。情報化社会における建築、デザイン、アートをめぐる制作環境の変化をテーマに、実制作と歴史的・理論的枠組の両面から議論の場を作り出し、企画全体の成果をIAMASの紀要へ収録した。

◎講演、その他

【シンポジウム】2019年6月1日「第22回文化庁メディア芸術祭アワードカンファレンス[アート部門]：セッション2「狂気性を孕んだアートはどこへ？」古舘健、石橋素、菅野創、福原志保、阿部一直、池上高志、伊村靖子（日本科学未来館）

【シンポジウム】2019年6月2日「第22回文化庁メディア芸術祭アワードカンファレンス[アート部門]：多様な表現分野からメディアアートへの転換「メディアアートの主題戦略としての社会批評的アプローチ」Jonathan Fletcher MOORE、Andrey CHUGUNOV、ゲオアグ・トレメル、伊村靖子（BMW GROUP Tokyo Bay）

【学会発表】2019年6月26日「The Public Sphere Engendered by Media Technology: Masaki Fujihata's Light on the Net (1996)」国際学会 ISEA（The Inter-Society for the Electronic Arts）、Asia Culture Center（光州）

【学会発表】2019年6月26日「“Site of Reversible Destiny Yoro AR”：Platform for Utilization of Art Database and Development of AR System」国際学会 ISEA（The Inter-Society for the Electronic Arts）、Asia Culture

Center (光州)

【講演】2019年9月7日「「アートと、社会と、デザインと、」vol.1 時代を変えたデザインー無印良品」(GALLERY CAPTION)

【シンポジウム】2019年12月5日「ソーシャル・ファブリケーションとメディア技術」秋吉浩気、安藤英希、堀江賢司、赤羽亨 (IAMAS)

【シンポジウム】2019年12月7日「生活の芸術化、芸術の生活化」藤田治彦、鞍田崇

【シンポジウム】2019年12月8日「メディア技術がもたらす公共圏」村田麻里子、立石祥子、門林岳史

【企画】2019年12月5日～8日 第8回岐阜おおがきビエンナーレ「メディア技術がもたらす公共圏」(IAMAS)

【トークイベント】2019年12月18日 美術系同人誌『パンのパン』4号出版記念トークイベント「美術批評の(個人的)変遷と背景を聞く会」きりとりめでる、gnck、菅原伸也、伊村靖子

【講演】2020年1月14日「メディア表現と資料研究」(静岡文化芸術大学)

【講演】2020年1月25日「「アートと、社会と、デザインと、」vol.2 岡本太郎、草間彌生、村上隆に見るアートとデザインの接地面」(GALLERY CAPTION)

【研究発表】2020年2月9日「「無印良品」の成り立ちから考えるアートとデザインの間」共同研究「マス・メディアの中の芸術家像」(国際日本文化研究センター)



岐阜おおがきビエンナーレ2019「メディア技術がもたらす公共圏」

Action Design Research Project の展示風景

◎テキスト

【評論】伊村靖子「養老天命反転 AR: 原田郁×荒川修作+マドリン・ギンズの世界」(ART FRONT GALLERY ウェブサイト):

http://artfrontgallery.com/project/Other_Projects/ar.html) 2019 年 5 月 2 日

【評論】伊村靖子「多様化するメディア環境が変えた作品と鑑賞者の関係」『美術手帖』第 1076 号、2019 年 6 月、p. 133

【書評】伊村靖子「インスタグラム時代の写真史の再編へ向けて」(後藤繁雄、港千尋、深川雅文編『現代写真アート原論』(フィルムアート社、2019 年) 書評)『読書人』2019 年 6 月 21 日、p. 6

【評論】Yasuko Imura, Shigeru Matsui, *The Public Sphere Engendered by Media Technology: Masaki Fujihata's Light on the Net (1996)*, "ISEA 2019 Proceedings", Asia Culture Center, Gwangju, Korea : pp. 413-415

【評論】"Site of Reversible Destiny Yoro AR" : Platform for Utilization of Art Database and Development of AR System, "ISEA 2019 Proceedings", Asia Culture Center, Gwangju, Korea : pp. 413-415

【彙報】伊村靖子「つくり手・受け手のメディア意識の変容から 80 年代を考える—共同研究「マス・メディアの中の芸術家像」第 2 回研究会レポート」(IAMAS web : <https://www.iamas.ac.jp/report/research-report2019715/>)

2019 年 8 月 28 日

【対談】伊村靖子、松井茂「都市計画の模型——受容論としての《養老天命反転AR》」三村尚彦、門林岳史(編著)『22 世紀の荒川修作+マドリン・ギンズ 天命反転する経験と身体』(フィルムアート社、2019 年 12 月 25 日)、pp. 234-245

【評論】伊村靖子「色彩と空間展から大阪万博まで—60 年代美術と建築の接地面」『現代思想』2020 年 3 月臨時増刊号、pp. 351-363

【彙報】伊村靖子「マス・メディアに読む脱中心化の思考—共同研究「マス・メディアの中の芸術家像」第 4 回研究会レポート」(IAMAS web : <https://www.iamas.ac.jp/report/research-report20191226/>) 2020 年 3 月 12 日

【研究ノート】伊村靖子「アートとデザインの接地面から公共圏を考える」『情報科学芸術大学院大学紀要』第 11 巻、2020 年 3 月、pp. 14-19

◎社会的活動

文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員

日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ メンバー

「マス・メディア空間における芸術表現と情報流通の研究」(科研費 17K02368)

研究分担者

国際日本文化研究センター「マス・メディアの中の芸術家像」研究分担者

◎学内の活動

【授業】メディア表現基礎 2、論文研究、総合学 C、デザイン特論 A

【授業】Action Design Research Project、移動体芸術